
銀魂日和

沙月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銀魂日和

【Nコード】

N9895G

【作者名】

沙月

【あらすじ】

私は、目覚めた時に銀魂の世界に来てしまっていた・・・！
主人公はオリキャラです。主

第一訓 時には強引さも必要

ぱつと目を開けた私は、これは夢だと自分に言い聞かせながらほつぺたをぎゅつとつまんでみる……。痛い、という感触が、確かに伝わってくる。……。ということは、これは、夢なんかじゃない……。？！

どこかで見たことがある、周りの景色……。でもこれは自分がもともと住んでいた日本ではないことぐらいは分かる。

そう、ここは、夢にまで見たことのある、大好きな漫画「銀魂」の世界だったのだ！
高くそびえ立ち、じつとたたずむターミナル。

なぜだかにらまれていたような気分になり私はついふつと目をそらし、次に町を見回してみた。

過ぎ行く人たちの格好は、もちろん今の私が着ているものとは程遠い。全員が全員というわけではないけれど、たいていの人が浴衣のようなものを着ていた。

だから、過ぎ行く人たちは、皆私を見ては嘲笑うような目つきになつたりあるいは隣にいる人にひそひそと話しかけたり……。

私だって、ここに来ると事前に分かっていたら、もう少しましな格好ができたはずなのに……。

今私が着ているものは、寝巻きのようなもの。だって私は、ここに来る前は寝ていたのだから。それでいきなりここに来てしまつて……。

つていうか、私、本当に銀魂の世界に来ちゃったのかな……！？
見るものすべてが漫画で見たことがある景色だけど……。だけど……まさか本当に……。！？

そのとき、だった。

「オイオイ！お前！なんつー格好してんだよ」

「え……?」

聞いたことのある、低い声。その声のほうに振り向いてみると

!!!

「そんな格好してつとみんなに笑われるぜ。お前江戸の住民なのか、つてな」

「ぎ……ぎ……銀さん!!!」まさか、本当に会えるなんて……!!その人は銀魂の主人公でもあり、私が一番好きな人……銀さんだった!

すると、目の前の銀さんは。

「は……はア!?何でテメエ俺の名前知ってるんだよ!?!」

……はっ!!やってしまったああ　!そうか、銀さんは私のことなんて知らないんだ……!!……でもこのままだとあたし行くところないし……

よしつ、万事屋に無理やり居座つちゃうか!……なんて。私は妄想を膨らませながら、とりあえず、

「万事屋に行くため」の嘘を言うことにした。

「あ、のっ!ちよつと、依頼があつてですね……?万事屋、さんに……」

「……本当か!?ウソだろテメー銀さんをだませると思うなよコノヤロー!」

「ウソなんかじゃないですからっ!とりあえず……万事屋さんに連れて行ってくださいよ!ね!?!」

「はアアア?!」私は苦笑いしながら、銀さんの腕をわしつとつかんで万事屋へと歩き出した……。とりあえず、今は何も考えない事にしよう……。

第一訓 時には強引さも必要 (後書き)

次の更新はいつになるか分かりませんが、一生懸命がんばります！

第二訓くなぞなぞって案外難しいよね(前書き)

やっと完成しました!ぜひ読んでみてください!

第二訓くなぞなぞって案外難しいよね

「…で？依頼つてのは？」銀さんは、万事屋の前まで来たところで私に言ってきた。そんなの…今言えるわけない、って！だって依頼なんて無いんだから…。

「…と、とにかく、中にいれてくださいよ！ね！？いいですよね！？」

「ちツ…お前、冷やかしだったら容赦しねエからな」銀さんは、舌打ちをしてから私を万事屋へと引きずっていく。どうしよ、冷やかし以外のなにものでもないんだけど…。でもここで引き下がるわけにはいかないしね…よし、なんとかここに居させてもらえるように説得しないと…！

「あー銀さん、おかえりなさい」

「銀ちゃん、食い物買って来たアルか!？」

万事屋の中に入ると、いきなり声が飛んでくる。

ま、ま、まさか…！

「新八くんと神楽ちゃん!？」

私は思わず叫んでしまった後、またハツとする。や、やば、またやつちゃった　　!!

「お前…こいつらを知ってるのか?!」

こいつら、と言って銀さんが指差したのは、銀魂ファンである私にとって知らないはずがない新八くんと神楽ちゃん。ま、まさか本当に会えるなんて!…っていうことは、ここは本当に万事屋なんだ…!!

「あ…い、いえあの、そういうわけじゃなくて、そ、その私がおにごによと口ごもっていると。」

「銀さん!その方は一体誰なんですか?」

新八くんが、丁度良いタイミングで銀さんに向かって言った。ナイ

又新八くん！

「…あア？こいつは」

銀さんは、私に出会った時のことを新八くんに説明しはじめる。どうしようどうしょ、どうやってこの場を切り抜けよう…！！

いつそのこと、本当のことを言ってしまったおうかな…

「…おい、お前！…とりあえず、そこに座れ」

銀さんはあたしに向かって言うと、自らも奥に一つだけ置かれた椅子に座ってジャンプを読み始める。私は言われた通り、テーブルの横に置かれているソファに腰を下ろした。

「お前何者なんだ？初めて会ったくせに俺達の名前を知ってるなんてよ…怪しすぎる。何だ、俺達の追っかけか？」

「…いえ追っかけというわけではないんですけど」

「チクシヨー最初からそんなこと知ってるんだよコノヤロオオオオ！…あーもうデリケートな銀さんの心が折れたじゃねーかアアア」

「…すいませんね、お嬢さん。この人は無視して、説明をお願いします」

子供みたいに泣いたふりをする銀さんを無視して、新八くんが私に言うてくる…

「…わかりました…全部、話しますね」

もう迷ってはられないよね…よし、信じてはもらえないだろうけど…本当のこと、言ってみよう！

「じ…実は私は、この江戸の住民なんかじゃないんです…！」

「…はアアアア？」「銀さん、新八くん、神楽ちゃんの全員が私の言葉にそう叫ぶ。

「お前何言ってるアルか！？この江戸にいるのに江戸の住民じゃないって、意味分かんねーヨ…！」

神楽ちゃんが、私に言うてくる。…うあ、やっぱり信じてもらえないみたい…いや、ここで諦めちゃダメだよ！

「あ、あのそういうわけじゃなくて…！私はこの世界の住民じゃない、ってことです…！日本の東京っていうところから、いつのまに

かこの江戸に飛んできちゃったんですよ!!」

涙目になりながらそう叫ぶ私。その光景を見た銀さんは焦り気味に言う。

「わーちよ、落ち着けて!!な!?!」

「だって…どうせ信じてもらえないんでしょ!?!」

「よ、よし、わかった!つまり、こういうことだよな!?!お前は、もともと日本の東京っていうところに住んでいた、んだよな?」

「は、はい」

「んで、気付けばこの江戸に来ちゃってた…ってわけだな?」

「そうです…だからこんな格好なんです!?!」

「な、るほどなア…」

銀さんは、ふむと考え込んだまま動かなくなる。…そして、数秒後。

「うん、まったく分からねーな」

「分からのかいイイイイイ!?!」

すかさず、新八くんのツッコミが銀さんに浴びせられる。わあ、新八くんの生ツッコミが見られるなんて…!やばい、感動かも!!

「そ…そんなまじまじと見つめられると、ちよっと照れくさいんですけど…」

私の視線に気付いた新八くんが、照れくさそうに頭をかきながら言うってくる。

「あ、すいません。新八くんの生ツッコミが見られたから嬉しくなっちゃって、つい…」

「あ!そういうえは!!」

私の言葉に、銀さんは思い出したように言うってくる。

「でもよ、何で俺達の名前知ってた!?!おまえはただ、東京ってところから来ただけなのによ!」

「知ってるに決まってるじゃないですか!銀さん達は

「銀魂」っていうアニメに登場してるんですから!マンガにも載ってるし!」

私の言葉に、全員が

「はア？」という顔をした。ま、まさかこの人達…自分達がアニメやマンガに出てること…知らないの!？」

「と、とにかく、銀さん達は、一部の人たちにとっては超がつくほどの人気者なんですよ!私もその、一部のうちの一人というわけです!」

「そうだったのか…銀さん達は、そんな人気者だったんだな、ま、わかってたけどな、新八くん、神楽ちゃん」

「うわ!いきなり自信持ちはじめたよこの人!」

銀さんの言葉に、新八くんが顔を引きつらせる。

「そ、そうアル、最初からわかってたヨ!」

神楽ちゃん…銀さんの後に続いて言った。

新八くんは、そんな神楽ちゃんにツッコむのが面倒になったのか、

「はいはいそうですね」と軽くあしらってから私に言ってきた。

「…どうするつもりなんですか、これから」

「う。そ、それは…」

痛いところ、突いてくるんだね新八くん…!よし…説得作戦、開始っ

…!

「…行くところが、無くて…どうしようかと思ってたところで銀さんに会ったんです!…すみません、銀さん…私、本当は依頼なんか無いんです…」

「…最初からわかってたつての。大体わかるんだよ、そういうヤツ」
銀さんは冷たくそう言ってくる。

どうしよ、この険悪なムード…銀さん、きつと怒ってるんだよね…!

「おい、お前…名前は?」

「…桐野きしの結衣ゆい、です…」

「よし、結衣!この万事屋生活の中で最も必要なのは何か…わかるか?わかったら、ここでお前をおいてやってもいい」

「う、え…!?えっ、と…!」

うそおおおお!!…焦っちゃ、ダメだ…よく考えないと!

あ、もしかして…!…!

「…笑い、とかですか!？」

「…笑い、だア？」

銀さんは、眉をぴくつと動かして言う。そして、数秒の沈黙後。

「正解!よくわかったな!！」

や…やったああ!私…ここに居させてもらえるんだ…!!

「よくわかったな。これからよろしくな?結衣!」

「結衣さん。ぜひツツコミ側になってくださいね!」

「ふツ…アタイのことは、歌舞伎町の女王と呼ぶがいいネ!！」

全員が、微笑みながら私に向かって言うてきてくれる…。私…本当にここにいていいんだね…!!

「桐野 結衣、14歳!万事屋さんの邪魔にならないように、一生懸命がんばります!…!!」

私は、満面の笑みでそう言った。

「…銀さん、本当にあの答えで合ってたんですか？」

「…んなわけねーだろ。本当の答えは、

「糖分」だったんだけどな。…ま、あいつにどんな事情があるのかは知らねエ。けど、放っておくわけにはいかねーしな？」

…銀さんと新八くんがこんな会話をしていたなんて、この時の私は全然気付いていなかった。

第二訓くなぞなぞって案外難しいよね（後書き）

読んで下さって、ありがとうございます！無駄に長くなっていました…

第三訓 一日中歩くと次の日が大変 (前書き)

ずっと書けませんでした・すいませんでした!

第三訓 一日中歩くと次の日が大変

「とりあえず、いろいろ説明しねーとな…ついてこい」

「え、あ、はいっ！」

あたしは、先に歩く銀さんを追って、万事屋を出た。そして銀さんが向かったのは、万事屋の下にある

「スナックお登勢」。もちろんここも、知ってるんだけどね…。

「そんな顔してるってこたア…ここも知ってたんだな」

「あ…はい」

銀さんからの問いに答え、あたしは、目の前にそびえ立つ少し古めのスナックを見つめた。まさか生で見る事になるなんてね…まだ全然信じられないんだけど。するとスナックの扉ががらりと開いて、中からお登勢さんが出てきた。一瞬あたしをちらりと横目で見てから、また銀さんに視線を戻して静かに言った。

「銀時…アンタついに誘拐なんてしちゃったのかい」

「何でそうなるんだよ、ついにポケたかババア」

「くオラ！誰に向かってそんな口きいてるんだい！！…そのアンタ。ケガは無いかい？コイツに何もされてないだろうねえ？」

お登勢さんは、あたしをじろじろ見つめてから銀さんをぎろりと睨んだ。銀さんは面倒臭そうにため息をつく、あたしと出会った時の事を一から話し始める。そして十分ぐらいたって、やっとお登勢さんはあたしと銀さんの話を理解してくれた。そりゃあんな話を聞いても、信じられないもんね…。

「まア…話は大体分かったよ。いろいろ大変だろうけどがんばりないつでもうちに来ていいからね」

「はっ…はい！ありがとうございます！！」

「お登勢サーン、何シテンデスカ？」

あたしがお登勢さんに頭を下げたその時、ちょうど中からネコ耳・キャサリンさんが出てきた。そしてもちろんあたしと目が合い、沈

黙。

「才前、誰ダヨ！」

「あ、あたしは桐野結衣つていいますっ！」

「誰力知ラネーケド、ひろいんノ座八ワタサナイヨ！ニヤンボワザアアア！！」お、おお、生ニヤンボワザだあ！！か、感動…！

「あー！お前にかまつてる暇はねエんだよ！！結衣、行くぞ」

銀さんは、あたしの手首をぐっと握って、ずんずん歩き始めた。あたしはとりあえず銀さんについていく。そして少し歩くと、

道場が見えてきた。あ、あの道場はもしかして…！

「もしかして、お妙さんの家ですかっ！？」

「あア…さすがに知ってるみてーだな。ま、一応あの凶暴女にも挨拶しとかなきゃならねーと思」

「あら銀さあん、今日はどういうご用件かしら？あとこの家には凶暴女さんなんて方いないと思うけど？」

「へッ…？」

後ろから澄んだ声がいきなり聞こえてきた。まさか、この声

は…！すると横にいた銀さんの顔がどんだん青ざめていき、ゆっく

り後ろを振り向きながらつぶやくように言った。

「ま、まさか…？」

「銀さん、ごきげんよう！今日はどのようなご用件かしら？」

ためーみみたいな下衆野郎に、うちの敷居をまたいでほしくねエんだよオオオオオオオ！！」

スーパ－の袋を持って、あたし達の後ろに立っていた女性。お

妙さんは、袋をなりふりかまわずかなぐりすてると、銀さんの首をすごい勢いで締めはじめた！！すると、また後ろからこんな叫び声

が聞こえてくる…。

「お妙さアアアアアん！結婚してくれエエエエ！！」こ…近藤さんの声だ！　　って、事は…！！

「おいおい、いい加減にしろよ近藤さん。これ以上いくと、俺らがあんたを捕まえなきゃなんねエようになっちまう」

「そうでさア。…つてか土方死ね」

「いや何でエエエエ!? 今俺の事関係無いよねエエエエ!!」

「…あ、見てくだせエ、俺らの事を見てるメスブタがいやすぜイ」

こんなやりとりをしていた土方さんと沖田さんが同時にあたしの存在に気付いて振り向いた。ひゃ、二人ともすごい美形…!すると近藤さんがお妙さんを見つけて、こつちに向かつて走つてきた!お妙さんをは、ただならぬ空気を感じたのか、銀さんから飛びのき、迫りくる近藤さんを見つけた。そして、にやりと怪しい笑みをうかべている…う、近藤さん、大丈夫かなあ…。

「ひ、ひ…死ぬかと思つたぜ…あの女、手加減てモンを知らねーのかよ…」

傷ついた銀さんが、あたしの横にへたりこんだ、まさにその時。

「ふん、万事屋の野郎じゃねーか。こんな所で一番会いたくねーやつに会つちまつたぜ」

「…へッ、それはこつちの台詞だぜ、マヨバカ」

「んだとオオオ!? マヨネーズをバカにするんじゃないやねエエエエエエエ!!」

「けッ、今日こそ証明してやらア　あんなものより甘いモンの方がうまいつて事をなアアアアア!」

「やれるもんならやつてみるやアアアア!!」

近藤さんを追いかけてここまで来ていた土方さんは、早速銀さんと衝突。はあ、もう落ち着かないなあ…お妙さん達も向こうでやりあつてるし(お妙さんが一方的だけど)…

「つたく…荒々しいやつらばっかで嫌になりますア…あんたもそう思いやせんかイ?」

「へッ…?」

「あんた、見たことねー顔ですなイ…」

気付けば、あたしのすぐ前に沖田さんが立っていた。そしてあたしの顔をじつと見つめてくる…や、ばい…すごいかつこいい…!!

「あんた、名前は?」

「あ、あたしは桐野結衣つていいます！いろいろ訳あって、今は万事屋さんに住まわせてもらう事になったんです」

「へエ…？」

沖田さんは、ふーん、と頷いてから言った。

「…何か気に入ったぜイ」

「…え？何がですか？」

「俺は沖田総悟でイ…新選組で働いてまさア。いつでも新選組に来なせエ」

「えっ…あ、あの…」

「じゃあな、結衣？」

沖田さんは、あたしのおでこをピンと指ではじくと、ニツと微笑んで来た道のりを引きかえしはじめた。

「あッ…てめ総悟！待ちやがれ！！」

土方さんは、そんな沖田さんを追いかけて走りはじめた。近藤さんも、ふらふらした足取りで二人を追って歩きだす。

「ふう…まったく、いい加減にしてほしいものだわ」お妙さんは、にこにこ笑みを浮かべてスーパーの袋を拾いはじめた。そして、あたしと目が合う。

「あらあら銀さん、いつの間にこんなかわいいガールフレンドを見つけたの？」

「そッ…そんなんじゃねエよ！こいつは、いろいろ訳あって今日から万事屋で住むことになった、結衣」

「はじめまして！あたし、桐野結衣です！！これからよろしくお願います！」お妙さんは、あたしの顔をまじまじと見つめてからふつと笑って、

「ふふ、よろしくね」

と言ってくれた。

「どうだ？この町には馴染めそうか？」

帰り道、銀さんはあたしに問うてくる。夕日に照らされた銀さんの顔は、少し不安な混じっているような、少し笑みを浮かべているような、複雑な顔に見える。あたしは力一杯答えた。

「もちろんです！皆、知ってる人ばかりだし！」

「　　ははは、そっぴやそっぴやだったか」

銀さんは満足そうな顔をして、あたしの髪をくしゃっと撫でてくれた。あたしの顔はみるみるうちに真っ赤になってゆく。

「今日からこの町は、お前の町だ」

銀さんの言葉に、あたしはうれしくなって、深くうなずいた。

第三訓 一日中歩くと次の日が大変 (後書き)

少しでも喜んでいただければ幸いです！

第四訓〜人騒がせなやつほど悪気は無い〜（前書き）

前作を書いてからあまり期間がたつてないですが、何だか書きたくなかったので投稿してしまいました！！よければ1話から読んでいただけるとうれしいです！！

第四訓〜人騒がせなやつほど悪気は無い〜

「おかえりネ、銀ちゃん！結衣！」

「もう、遅いじゃないですか！神楽ちゃんの面倒見るの結構大変なんですから」

「んだとコラアアア！」

「ぎゃアアアアア！」新八くんの悲痛な叫びが、万事屋に響き渡っている。　　ついさつき、あたしと銀さんは歌舞伎町めぐりを終えて帰ってきたのだ。

「そういえば銀ちゃん、さつき定春が何かくわえてたヨ。ね、定春？」

「ワッッ！」

神楽ちゃんはそう言うと、そばにいた巨大な白い犬　　定春くんを優しく撫で始めた。定春くんは、そんな神楽ちゃんの腕を見るかぎりかなりの力で噛んでいる…神楽ちゃんは全然気にならないみたいだけど…。

「あ。あつたアル、これヨ」

神楽ちゃんは、定春くんのそばに転がっていた黒い丸いものを見つけた。そしてそれを銀さんに渡した。

「お…オイこれア…」

銀さんの顔が、お妙さんを見つけた時みたいに真っ青になってゆく。

「これ…爆弾じゃねエかアアアアアアア！」

「えエエエエエ！??」それに続いて新八くんも、悲鳴をあげている。　　でもあたし、何でこんなに冷静なんだろ…あ、いつも漫画でこんなピンチな風景を見てたからだ…。

「ちよちよちよ！…！どどどどうするんですかア銀さアアん！？」

「るせーなダメガネ！…！お、お前どっかに捨ててこい！…！」

「何で僕なんですかア！？もとはといえば定春が拾ってきたんだから神楽ちゃんが捨てて来てよ！！」

「んだとコルア新八よオ、目立たねーくせに！」

「ああアアアアアア！？デリケートな所突いてくんじゃねーよオオ！？僕もこう見えて気にしてるんだよオオオオオオオオ！！」

「てッ、てめーらこんな時に喧嘩すんな！！」

新八くんの意見を聞いた神楽ちゃんは、巻き舌で新八くんに詰め寄り始め、新八くんは何とか応戦し、それを必死になって銀さんが止めている　ん？何か今爆弾が発してる

「ピッ、ピッ」っていう音が大きくなつたような…？

「あ…あの、皆さん！！」

「「「あアん！？」「」「」　言い合いをしていた三人の顔が、一瞬であたしに向けられる。あたしはためらいがちに言った。

「その爆弾…あと何分くらいで爆発するんですか？」

「…ん？」

銀さんはあわてて爆弾を眺めた。

「に…二…分？」

「ぎゃアアアアアア！！」新八くんは大声で叫び、神楽ちゃんはパニックで酢昆布をちぎりはじめ、銀さんは爆弾をどうにかできないかと必死に考え始めた…どうしよう…どうすれば…。

「銀さん！！爆弾を見せて下さい」

「何か思いついたか！？」銀さんはあたしに爆弾を渡しながら期待のこもった眼差しで見つめてくる。あたしは爆弾を眺めまわした。

別に方法を考えてついた訳じゃないけど、何かヒントは無いの…！？

「駄目だ…何も思いつかねー…でももう時間もねーからどっか遠くに運ぶわけにもいかねーし…」

「あ…あと30秒…！！」

ピッ、ピッ、ピッ…と、爆弾の発する音が徐々に大きくなってくる。

「ど、どうするんですか銀さん！！僕らこのまま爆死する事になったら…！？」

「そうヨ！私こんなムサイ所で死ぬなんて」
「お前らアアアアア！最後まで諦めんなア！！」銀さんが叫ぶと、新八くと神楽ちゃんは一瞬で口を閉じた。きつと、真剣な銀さんの表情は説得力があるんだと思う。

「あと十…九…！！」

どうしようどうしようどうしようどうしよう…！！このままじゃ、ほんとに皆死んじゃう…！！

「五…四…！！」

銀さんのカウントダウンのひとつひとつが、重く心にのしかかってくる…！！

「くそオオオオオオ！！」

銀さんの悲鳴と、爆弾の爆発音が重なって　　な、い？あれ？

『銀時！近いうちにそっちに伺ってもよいか？少し息抜きがしたくてな…定春殿にこの爆弾式の手紙を預けたのだが…うまく届いたか？それでは、また。桂より』

爆発するはずの爆弾は、こんな言葉を発して静かになった。

つて…え？え？何で？

「何だったんだ、今の…」

「今のつて…桂さんの声ですよ…？」

あたしの言葉に、銀さんは奇立ちを隠せない様子で頷き、言った。

「つまり…あの爆弾は、ツラからの手紙だった…って事か？」

「あ！見てください銀さん！！」

新八くんは、持っている爆弾を銀さんの目の前に差し出した。よく見ると、爆弾の裏側に

「爆弾式れたー」と書いてある…。

「ふ、フン！私は最初から分かったヨ！ね、ねねね、さ、ささ定春ウ？」

「いや神楽ちゃん、動揺隠せてないから…でも皆無事でよかったですよね…！！」

「おいおい、銀さん久しぶりに焦ったじゃねーかバカヤロー…！結

衣？」

神楽ちゃんや新八くん、銀さんが喋っている中で、あたしだけがうつむいていたので、銀さんがあたしの顔を覗きこんでくる。

「あ、あたしは全然大丈夫で」

「…そりやそうだよな。結衣はこついうの初めてなんだもんな…」

銀さんはあたしの言葉を遮って、あたしを見つめた。

「…悪かったな。怖かっただろ」

「い、いえ…」

「全部ヅラのせいだな！今度来たら落とす前きつちりつけとくらよ、すまねエけどそれで許してくれねーか？」

「…はい、もちろんです」あたしの言葉に、銀さん、神楽ちゃん、新八くんは、にやりと笑った。あたしももちろん笑った。

次の日。歌舞伎町の空は、青々と晴れていた。何だかとってもいい日になりそうな予感…。

「あー…暇ですねー…」 「いいじゃねエか。平和が一番なんだよ、スリルなんてものア人生に必要なエってんだ」

新八くんの言葉に、銀さんはだるそうに答えると、近くにあったジャンプを読み始めた。その時。

「銀時イ！！私だ、桂だ！おい、いるのか！？」

ドンドンと万事屋の戸が叩かれ、こんな声が聞こえてきた。この声は…！！

「…ヘツ、来たぞ、てめーら。準備はいいか？」

「私は準備万端アル」

「僕も大丈夫です」

銀さんは全員に確認を取って、最後にあたしに

「結衣…遠慮しなくていいからな？」と言った。あたしは苦笑いしながら頷く。

「よし、ちょっとお前らはここで待つてろ」

銀さんは、戸の方までゆっくり歩いていくと、戸の外にいる桂さんに言った。

「おーツラじゃねーか」

「ツラじゃない桂だアアアアアアア！！」

「ま、上がってくれや」

「う、うむ、かたじけない。あア、定春殿に預けていた伝言、ちゃんと聞いてくれたか？」

「あア、あれな…」

ガラガラ…という音のおかげで、銀さんが戸を開けて桂さんが家の中に入ってきた事がわかる。

「いやア、ご無沙汰だなりーダー、新八殿…と、君は？」

「あたしの名前は桐野結衣です。今は万事屋さんで雇ってもらってます」

桂さんに尋ねられ、あたしは答えた。桂さんは黒いさらさらの長髪をなびかせながら、びっくりした眼差しであたしを見つめている。

「ほオ…銀時、お前はこういう娘に興味があるのか」

「ツラア…今はそんな事アどうでもいいんだよ 全員、出撃イ

イイイ！！」銀さんの言葉を合図に、全員が桂さんに飛び掛かる。

「ためッ、ややこしいんだよ！何なんだあの爆弾はアアアア！！」

「ためーのせいでビビっちゃっただろうがアアアア！…ま、ちょっとだけどな」

「神楽ちゃん、意地張りすぎだつて…」

銀さんと神楽ちゃん、新八くんは、容赦無く桂さんに罵声や拳を浴びせている…も、もういいんじゃないかな…。

「あ、あのっ！！もういいんじゃないでしょうか…」あたしの言葉に、桂さん以外は不服そうな顔をしたけど、桂さんは大いに頷いている。

「…結衣殿！それに銀時、新八殿、リーダー！！私もこの通り反省している…あの爆弾は確かに少しまぎらわしかったな…すまぬが今

日はこのくらいにしておいてはくれぬか？」

「…はい！いいですよ、銀さん」

桂さんが言ってきたので、あたしは銀さんの方に振り向いた。

「…しゃあねエ、ツラア、結衣に感謝するんだな」

「うむ！…恩に着る、結衣殿！」

桂さんは、嬉しそうに微笑んでからあたしに言った。その美形に、あたしもついつい微笑んでしまう…ほんっとイケメンに弱いな、あたし…。

「…さ！今日はゆっくりしてってくださいね、桂さん！」

あたしの言葉に、桂さんは笑った。そして銀さん達の方はというと

「…まったく好きにしろ！」どっちかというと、笑うというより苦笑いをしていた。

第四訓〜人騒がせなやつほど悪気は無い〜（後書き）

もしも楽しんでいただけたのなら、ぜひ評価のほうよろしくお願
い
します！！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9895g/>

銀魂日和

2010年10月9日02時59分発行